

多義動詞としての「知る」と「分かる」の使い分け ： コーパスを活用した類義語分析

著者	生天目 知美, 高原 真理, 砂川 有里子
雑誌名	国立国語研究所論集
号	12
ページ	63-79
発行年	2017-01
URL	http://doi.org/10.15084/00000854

多義動詞としての「知る」と「分かる」の使い分け

——コーパスを活用した類義語分析——

生天目知美^a 高原真理^b 砂川有里子^c

^a東京海洋大学／国立国語研究所 共同研究員

^b国立国語研究所 共同研究員

^c国立国語研究所 研究系 日本語教育研究領域 客員教授／筑波大学名誉教授

要旨

本研究は日本語学習者が理解しやすい類義語指導のための基礎研究として、多義動詞である「知る」と「分かる」の使い分けを体系的に記述することを目的とする。体系的な記述のために大規模なWEBコーパスから用例収集を行い、「知る」と「分かる」の各語義で置き換え可能性を検討した結果、「情報の獲得・理解」「状況の把握」「会得」「本質理解」という4つの類義関係に整理することができた。さらに、類義関係があっても「知る」と「分かる」が置き換えできない時、それぞれの意味的対立がどこにあるのかを分析した結果、両形式が表す認知状態の変化における4つの側面（「未知状態からの変化」「過程性の焦点化」「逆行の変化」「内的な了解能力」）から各類義関係における使い分けが説明できることを示した*。

キーワード：類義語、多義語、使い分け、コーパス、認知状態の変化

1. はじめに

本研究は、日本語学習者が理解しやすい類義語指導のための基礎研究として、多義動詞である「知る」と「分かる」の使い分けを体系的に記述することを目的とする。

「知る」と「分かる」は(1)のようにどちらも置き換えが可能な場合がある一方、置き換えができなかったり不自然になったりする場合も少なくない。そのため、(2)(3)のような日本語学習者による誤用や不自然な使用は初級のみならず中上級になってもなお観察される。

- (1) 一週間後に検査結果を知った。[分かった]¹
- (2) ??学校の教科書が難しく、全然知らない。[分からない]
- (3) ?テレビを見なかったので、東京で地震が起こったことが分からなかった。[知らなかった]

このような誤用や不自然な使用が生じる要因には、「知る」と「分かる」が多義語であり、意

* 本稿は国立国語研究所独創・発展型共同研究プロジェクト「日本語学習者用基本動詞用法ハンドブックの作成」(プロジェクトリーダー：ブラシャント パルデシ、実施期間：H21.10-H24.9)および基幹型共同研究プロジェクト「述語構造の意味範疇の普遍性と多様性」(基本動詞ハンドブック作成チーム)(プロジェクトリーダー：ブラシャント パルデシ、実施期間：H24.10-H28.3)の研究成果である。

また、本稿は2015年度日本語教育学会秋季大会にて発表した内容に加筆・修正を行ったものである。発表に際し、貴重なコメントを寄せて下さった方々に感謝申し上げます。

¹ 例文において他方の形式へ置き換えた場合、「知る」は「を」、「分かる」は「が」へと助詞が変化するが、便宜上助詞が変わることについては明示せずに動詞だけを示す。なお、置き換えた際の許容度の判定は括弧内に□(自然)、△(不自然)、* (許容できない)の3つを示す。「不自然」とは、同じ類義関係における意味としては不自然であるが、無理に解釈すれば当該の意味とは別の意味で解釈できるものを指す。

味が近似した語義が複数存在すること、またその対応関係が複雑であることが挙げられる。この共に多義語である「知る」と「分かる」を類義語として捉え、その詳細な使い分けを明らかにしようとした研究に、高橋（2003）、張・馬場（2005）、葦原（2010）がある。これらの研究では、一部の語義について置き換え可能性に関する分析結果が示されている。しかしいずれの研究においても、「知る」と「分かる」の全ての語義について検討された結果ではなく、網羅性・体系的が十分とは言えない。その理由は、語義を検討するにあたり分析対象とした用例が文学作品や日常会話など場面が限定されたものであるために、限定された用法しか観察できなかったことが大きい。また、置き換えができない場合を補語名詞の特徴や具体的な意味的特徴によって説明しているが、個々の要因を指摘するに留まっており、「知る」と「分かる」が持つどのような意味的特徴の違いから個々の置き換えが不可能なケースが生じているかという観点で整理された研究は見られない。

そこで本研究は、大量の用例数が確保される WEB コーパスを分析資料に用いることで「知る」と「分かる」にどのような類義関係があるか網羅的・体系的に整理し、置き換えができなくなる場合が「知る」と「分かる」のどのような意味的特徴の違いに由来するのかを明らかにすることを目的とする。

2. 先行研究

文法的な観点から見ると「知る」は他動詞、「分かる」は自動詞であり、格フレームや受動態の可否に大きな違いがある。また、Hopper and Thompson（1980）が指摘しているように、意味的な側面に着目した場合、他動詞文と自動詞文は連続体をなし、その違いは他動性が高いか低いかという程度差にある。このような観点から見た場合、「知る」は「分かる」よりも他動性が高いという違いがある。一方、角田（2007）は、Hopper and Thompson（1980）が規定した他動性の10の意味的特徴のうちの被動作性を重視し、その度合いによって二項の述語の分類を行っている。角田（2007）によると「知る」と「分かる」は同一の意味範疇である「知識」に位置付けられ、ともに知識に関する認知状態の変化を表すという点で類似性が存在し、両語は類義語という関係になる。

類義語としての「知る」と「分かる」について着目した先行研究には牧野成一（1973）、渡辺（1987）、牧野美智子（1996, 1998）、高橋（2003）、張・馬場（2005）、葦原（2010）等がある。

「知る」と「分かる」の相違点について、牧野（1973）は「分かる」が可能等の意味的特徴を持ち、思考過程を前提とした認識作用を表すことを、渡辺（1987）は同定するための潜在的能力を表すことを指摘している。一方、「知る」については、牧野（1973）が単なる知識を表し、直観的で表面的な認識作用を表すこと、渡辺（1987）が外部からの情報獲得を示すこと、牧野（1996, 1998）が体験性を有するという特徴を持つことを指摘している。これらの先行研究では、類義語としての「知る」と「分かる」の相違点には着目しているものの、置き換え可能な場合については十分に検討されておらず、牧野（1996）による、内容の同定を表す際に二語の置き換えが可能との指摘に留まっている。また、これらの先行研究では、二語のもう1つの特徴である多義性に

についても着目されていない。

「知る」と「分かる」の多義性と二語の置き換えの両方に着目しているのが高橋 (2003), 張・馬場 (2005), 葦原 (2010) である。高橋 (2003) は多義語分析において、「知る」には4つの語義²、「分かる」も下位分類を含めて4つの語義があることを指摘し、語義間の関連についても検討を行っている。そして二語の置き換えについては、「知る」の語義の1つである、「新規の情報を得る」という意味において、情報の存在ではなく内容が問題になる場合のみ「分かる」との置き換えが可能だと指摘している。しかし、類義語分析の結果³と関連付けての記述とはなっておらず、二語の置き換えについての記述は上記の語義のみで、その指摘は一部に留まっている。また、張・馬場 (2005) も日中語の比較の中で、高橋 (2003) らの主張を踏まえて、「知る」には7つの語義⁴、「分かる」には5つの語義があると指摘し、置き換えについては、「知る」の語義の中に代替可能なものが2つあることを指摘している⁵。しかし、「分かる」については「知る」との置き換え可能性についての記述が行われていない。

以上のように、高橋 (2003), 張・馬場 (2005) では、「知る」と「分かる」の多義構造についての考察がなされているものの、そこでの分析対象が文学作品に限られているという点から、それぞれの語義が実際の使用に即した網羅的なものとなっているかについては疑問が残る。また、「知る」と「分かる」の使い分けについても、「知る」が「分かる」と置き換えられる場合の一部の用法に限った言及となっており、「知る」と「分かる」の語義ごとの検討はされていない。

一方、葦原 (2010) は、談話中での「知る」と「分かる」の使い分けに着目し、収集した発話例を「知る」か「分かる」に置き換え可能かどうかで分類した上で意味分析を行っている。その結果、「分かる」のみ使用可能な語義⁶は下位分類まで含めて10、「知る」のみは2つ、置き換え可能なものは2つであると指摘している。葦原 (2010) の、実際の使用例である談話を分析対象としている点と、二語の使い分けを日本語学習者向けに整理している点は評価に値する。しかし、収集した用例数が「知る」と「分かる」を合わせて430例と少ないため、多義構造が網羅的に分析されているとは言い難い。また、初級レベルの学習者には有用な情報が提供されているものの、中級レベル以上の学習者を対象とした場合は、それぞれの語の多義構造と使い分けを体系的、網羅的に関連付けた分析が求められる。さらに、「知る」と「分かる」の置き換えの原理を明らかにするためには、置き換えが可能個々のケースの記述のみに留まらず、個々の現象を生じさせる「知る」と「分かる」の意味的特徴の違いを明らかにする必要がある。

² 高橋 (2003) では「別義」としている。

³ 高橋 (2003) では補語に着目した類義語分析を行っており、「知る」は新規情報の獲得を表し、補語名詞句は一般性を持つ客観的情報と解釈されるのに対して、「分かる」は「XはYである」といった同定を表し、同定に至るまでのプロセスの存在を含意するものであり、補語名詞句は主観的情報と解釈されると述べている。

⁴ 張・馬場 (2005) では「用法」としている。

⁵ 「体験している」という語義における「対象に関する実質的な内容」を示す場合と、「習得している」という語義の2つが「分かる」との置き換えが可能だと指摘している。また、「知る」の「新規情報を獲得する」という語義では、「分かる」と置き換えると文意が変わることを指摘している。

⁶ 葦原 (2010) では「意味」としている。

3. 研究課題と方法

「知る」と「分かる」の使い分けを十分に理解するため、本研究では下記の2つの課題に取り組みことによって体系的な記述を試みる。

- ①多義語である「知る」と「分かる」のうちどの語義において意味が近似するか、類義関係を整理する。なお、多義語として持つ語義の体系は、国立国語研究所の「基本動詞ハンドブック」のために筆者らが作成した「知る」と「分かる」の記述に基づく⁷。
- ②類義関係が認められる語義においては「知る」と「分かる」を置き換えられることが少なくないが、常に置き換え可能であるわけではない。両形式の使い分けが生じるのはいかなる場合なのか、各類義関係において100例ずつ収集し、置き換えができないと判定した用例について「知る」と「分かる」が持つ意味的特徴の側面から使い分けの要因を探る。

以上の2つの課題を通して、多義語としての「知る」と「分かる」の使い分けを整理する。

用例の収集には約11億語の大規模コーパスである筑波ウェブコーパス (Tsukuba Web Corpus: TWC) がオンラインで検索できるレキシカルプロファイラーのNINJAL-LWP for TWC (NLT: <http://nlt.tsukuba.lagoinst.info>) を用いた。TWCの使用によって用例の多様性・網羅性が確保できるだけでなく、語義が類似する例を多数収集し、その違いを詳細に検討することが可能になる。用例収集は分析の段階によって異なる方法を用いたため、具体的な収集方法については各分析段階において述べる。

4. 「知る」と「分かる」における多義語・類義語としての特徴

4.1 多義語としての特徴

ここではまず、多義語としての「知る」と「分かる」が持つ語義の分類とコアイメージについて確認する。本研究で取り上げる「知る」と「分かる」の各語義は、国立国語研究所の「基本動詞ハンドブック」にて筆者らが執筆した「知る」の9語義と「分かる」の6語義である。それぞれの語が持つ語義を網羅的に把握するために、語義の認定については以下の手順で行った (詳細については赤瀬川・パルデシ・今井 (2016) 第3章を参照のこと)。

- ① NLTを用いて、各動詞が取る格パターンごとに、コロケーション (共起名詞) の頻度上位100語とログダイス⁸上位100語を抽出し、固有名詞一般や「の」、重複した語等を外す。
- ②①で選定したコロケーションを意味のグループごとにまとめる。
- ③②の結果と既存の国語辞書等を参考に語義の認定を行う。

なお、語義認定においては、意味による語義分類はもちろんのこと、接近する意味を持つ語義

⁷「基本動詞ハンドブック」の「知る」と「分かる」の記述は、以下を参照されたい。

<http://verbhandbook.ninjal.ac.jp/headwords/shiru/>

<http://verbhandbook.ninjal.ac.jp/headwords/wakaru/>

⁸ ログダイス (logdice) : 言語表現の共起のしやすさを分析するために使用される統計値の1つ。

については、受身、尊敬、使役、意思、継続、結果・完了といった文法形式の観点からも分類を行っている⁹。以上の方法を用いて認定した各動詞の語義、さらに基本義をもとに作成したコアイメージと語義間の関係を示す多義ネットワークを合わせて図1と図2に示す。


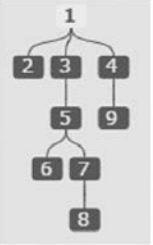
知る	
コアイメージ	語義
	<p>①情報獲得: 新しい情報・知識を得る。 (例) 今朝のニュースでその事件を知った。</p> <p>②内容把握: 内容がどのようになっているか理解する。 (例) 滞在経験が長かった彼は、その国の政治事情をよく知っている。</p> <p>③状況・状態の気づき: ある状況に気づく・認識する。 (例) 彼女はそこに本人がいるのを知らず、悪口を言ってしまった。</p> <p>④人との面識: 人と面識がある。 (例) 友人に連れられてパーティーに参加したが、知っている顔が全くなく、心細く思った。</p>
多義ネットワーク	
	<p>⑤経験を伴った理解: 経験などを通して実感とともに理解する。 (例) 病気で入院してみても初めて、健康であることの大切さを知った。</p> <p>⑥本質理解: 物事の本質に気づき、理解する。 (例) ライバルに勝とうと思ったら、まずは自分自身を知ることである。</p> <p>⑦体験・感覚の欠落: (否定形で) そのような体験・感覚がない。 (例) 子供たちは疑うことを知らない澄んだ目をしていた。</p> <p>⑧限界の欠如: (否定形で) 限界がなく、終わりなく続く。 (例) 彼女の物欲は満足の限界を知らないほどだ。</p> <p>⑨関わり拒否: (否定形で) 人や事柄との関わりを持たない。 (例) 自分さえ良ければ、他の人はどうなっても知らない。</p>

図1 「知る」のコアイメージ・多義ネットワーク・語義

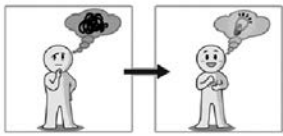
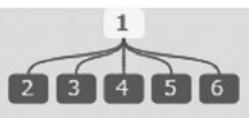
分かる	
コアイメージ	語義
	<p>①不明瞭な事柄の明確化: 不明瞭な事柄が、何らかの状況によって明確な状態になる[なっている]。 (例) A: 「田中さんの住所、分かるかな」 B: 「すみません、ちょっとすぐには。家のアドレス帳を見れば分かるんですが。」</p> <p>②同定: 人やものが、ある人・あるものだと同定できる。 (例) 彼は一目でその男が犯人だと分かった。</p> <p>③会得: 能力や技術を会得する[している]。 (例) 何度もやっているうちに、だんだん釣り糸を引き上げるタイミングが分かってきた。</p>
多義ネットワーク	
	<p>④本質理解: 物事の本質が理解できる。 (例) A: 「これ、古本なのに高くない？」 B: 「いや、この本の本当の価値が分かっている人なら納得する値段だね」</p> <p>⑤気持ち・意図の理解: 人の気持ちや意図が理解・共感できる。 (例) なぜそんなことをするのか、意味が分からない。</p> <p>⑥承諾(応答): 相手の依頼や要求を聞き入れたことを表す応答。 (例) A: 「悪いがこの仕事、明日までに仕上げておいてくれるかな」 B: 「はい、分かりました」</p>

図2 「分かる」のコアイメージ・多義ネットワーク・語義

⁹例えば、「知る」の語義④「人との面識(例: 昔からその人をよく知っている)」と語義①「情報獲得(例: その人の名前は友人に聞いて知った)」の違いは、すでに相手についての情報や知識を得た状態かどうかという点と、語義①とは違って語義④が使役、意思の形式を取れないことである(語義①例: あの有名人の名前を知ろうとした。／語義④例: *なんとかしてあの有名人を知ろう)。

「知る」と「分かる」のコアイメージは両語ともに認知状態の変化を表しており、「知る」は主体がもともと認識していなかった情報を外部から新規に得ることを表している。それに対して「分かる」は、ある事柄についての情報や認識はあるものの不明瞭な状態にあり、それが明瞭な状態に変化することを表している。

4.2 類義語としての特徴

4.1 で示した各語義の間で「知る」と「分かる」はどのような語義で意味が接近するのだろうか。「知る」と「分かる」の類義関係を明らかにするため、まずは語義ごとに二語の置き換えが可能かどうかの判定を行った。具体的には「基本動詞ハンドブック」に掲載されている用例と、NLT を使ってコロケーション情報をもとに収集した用例を用いて、「知る」と「分かる」を置き換えても文意が変化しない場合を置き換え可能、置き換えると意味をなさなくなったり、文意が変化する場合を置き換え不可能と判定する方式で行った¹⁰。

その結果、概ね置き換えが不可能なため類義関係がある語義として認められなかったものは、「知る」の語義④、⑦～⑨、「分かる」の②、⑤、⑥である。

- (4) 「○○の専門分野に詳しい人をしらない？」[*わからない] (「知る」語義④人との面識)
(生年月日でわかる性格・相性・運勢)
- (5) つまちゃんは汚れを知らない清らかな心の持主でした。[*分からない] (「知る」語義⑦体験・感覚の欠落)
(『一女優の歩み』)
- (6) 新しいコーチを迎えてからというもの、その選手の成長はとどまるところを知らなかった。
[*分からなかった] (「知る」語義⑧限界の欠如) (基本動詞ハンドブック用例)
- (7) 「あたしがそこまでやってモテなかったら、おとしまえつけてくれるんでしょうね」アカネ「知るか(笑)」。[*分かるか] (「知る」語義⑨関わり拒否) (『アニバーサリー・ソング』)
- (8) スクランブル交差点を渡るお姿を一目見て新川和江さんとわかった。[*知った] (「分かる」語義②同定)
(スペシャル対談～藤本裕子が各界トップに迫る)
- (9) 人の痛みが分からない人も沢山います。[*知らない] (「分かる」語義⑤気持ち・意図の理解)
(教えて！goo)
- (10) (妻と夫)「今日はみんなでレストランに行くから、早めに帰ってきてね」「うん、分かった。」
[*知った] (「分かる」語義⑥承諾) (基本動詞ハンドブック用例)

一方、概ね置き換え可能とされたのは、「知る」の語義①、②、③、⑤、⑥¹¹、「分かる」の語義①、

¹⁰ 下記の例のように、文法形式が異なっても文意が同じと認められるものについては置き換え可能と判断した。

例) 友達を見れば、その人がわかる。[知ることができる]

例) 彼の連絡先を知っている。[わかる]

¹¹ 「知る」の語義④「人との面識」についても、以下で示す例のように「分かる」と置き換え可能な例があった。しかし、それ以外では類似性があまり認められなかったため、本研究における類義関係として認めなかった。

例) 「ねえ、A社の鈴木さんって、知ってる？」「うん、鈴木さんには一度会ったことがあるよ」[分かる]
(基本動詞ハンドブック用例)

③, ④である。以下においては、置き換え可能なこれらの語義のみを対象に分析を行う。

これらの置き換え可能な語義を意味的に分類した結果、「知る」と「分かる」には以下 I ~ IV の 4 タイプの類義関係が認められた。

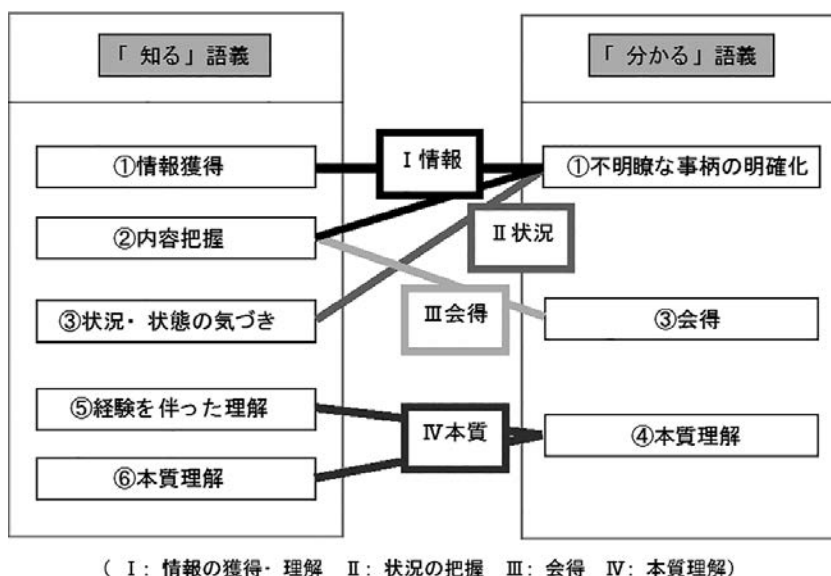


図3 「知る」と「分かる」の類義関係

タイプ I は「情報の獲得・理解」を表すものであり、「知る」の語義①「情報獲得」(例 11)、語義②「内容把握」(例 12)、「分かる」の語義①「不明瞭な事柄の明確化」(例 13) が該当する。

- (11) ディハラドンから手紙が来て、(筆者注:兄が) インドに行ったことを知った。[分かった]
 (「知る」語義①情報獲得) (ネパールの瞑想少年)
- (12) 滞在経験が長かった彼は、その国の政治事情をよく知っている。[分かっている] (「知る」
 語義②内容把握) (基本動詞ハンドブック用例)
- (13) 1 週間後に検査結果が分かりました。[知りました] (「分かる」語義①不明瞭な事柄の明
 確化) (舌癌の治療)

タイプ II はその時起こっている状況や出来事を認識する場合で「状況の把握」とした。「知る」の語義③「状況・状態の気づき」(例 14) と「分かる」の語義①「不明瞭な事柄の明確化」(例 15) が該当する。

- (14) 消毒綿が針先についていたのを知らずに刺してしまったらしい。[分からずに] (「知る」語義③状況・状態の気づき) (鍼灸専門学校)
- (15) 日本全国の高速道路, 一般道路の最新交通状況がわかります! [知ることができます] (「分かる」語義①不明瞭な事柄の明確化) (車好きの自動車情報)

タイプ III は何らかの技術や能力を会得している場合で「会得」とした。「知る」の語義②「内容把握」(例 16) と「分かる」の語義③「会得」(例 17) が該当する。

- (16) はねずに揚げる方法を知っている方教えてください。[分かる] (「知る」語義②内容把握) (MSN 相談箱)
- (17) 典型的な例は, 外国に理想の夢が存在していたとしても, その国のこと, そして何よりもその国の言葉が分からなければどうにもなりません。[知らなければ] (「分かる」語義③会得) (学習の意味と勉強する理由)

最後にタイプ IV は物事の本質や価値を理解する場合で「本質理解」とした。「知る」の語義⑤「経験を伴った理解」(例 18), 語義⑥「本質理解」(例 19), 「分かる」の語義④「本質理解」(例 20) が該当する。

- (18) 病気で入院してみても初めて, 健康であることの大切さを知った。[分かった] (「知る」語義⑤経験を伴った理解) (基本動詞ハンドブック用例)
- (19) 速読の本当の意味を知りました。[分かりました] (「知る」語義⑥本質理解) (リーディングフィールズ基本の速読講座)
- (20) 親元から離れて初めて, 親のありがたみが解ったことでしょうね。[知った] (「分かる」語義④本質理解) (maro@hawaii)

4.3 4つの類義関係における置き換え可能性

前節では4つの類義関係において、「知る」と「分かる」の置き換えが可能な例を提示した。しかし、同じ類義関係であっても、「知る」と「分かる」の置き換えができない用例も存在する。以下の(21)の「知る」は①「情報獲得」、(22)の「分かる」は①「不明瞭な事柄の明確化」を表している。「情報獲得」と「不明瞭な事柄の明確化」はタイプ I 「情報の獲得・理解」の類義関係にあるが、(21)を「分かる」に、(22)を「知る」に置き換えることは不可能あるいは不自然である。

- (21) 今回の調査で、「一人で夕食を食べる頻度が高いほど、身も心も休まらない」という結果をはじめて知り, 意外な印象を受けた。[△分かり] (「知る」語義①情報獲得) (やずや食と健康研究所)
- (22) 交付通知書を紛失してしまい、パスワードが分からなくなりました。[*知らなく] (「分かる」語義①不明瞭な事柄の明確化) (特許審査着手見通し時期照会用パスワードの交付申し込みについて)

そこで、各類義関係において置き換え可能性に関与する意味的対立を明らかにするため、以下の方法で分析を行った。

- ① NLT を用いて、「名詞+を+知る」と「名詞+が+分かる」というコロケーションパターンを頻度順に抽出した。その結果、「知る」は 7953 語、「分かる」は 5847 語のコロケーションが抽出された。次に、「知る」と「分かる」のどちらとも共起する名詞を特定し、その結果 3900 語が抽出された。
- ②①で特定した 3900 語のコロケーションのうち、「知る」「分かる」の各頻度上位 100 語の中から、4 つの類義関係に該当するものを判定した（どちらか一方が上位 100 語以内であれば検討対象とする）。次頁の表 1 は、4 つの類義関係の各上位 5 語のコロケーションを示している。なお、「II. 状況の把握」については、コロケーションレベルで判定できるものが「の」のみであった。表内の用例数は当該語義に該当しない用例も含めた全用例数を、頻度ランキングは「知る」「分かる」ともに全コロケーション中の順位を示している。
- ③ 4 つの類義関係それぞれのコロケーションについて、全用例中で当該語義に該当する用例数の割合が多く、かつ短い用例でも容易に文脈が把握できると思われるものを典型的コロケーションとして認定した。それぞれの類義関係で典型的コロケーションとして認定した補語名詞は以下の通りである（典型的コロケーションは表 1 において網掛けにて示している。）
 - I. 情報の獲得・理解：「名前」
 - II. 状況の把握：「の」
 - III. 会得：「日本語」
 - IV. 本質理解：「価値」
- ④③で認定した典型的コロケーションごとに、各類義関係に相当する用例を NLT から「知る」と「分かる」それぞれ約 100 例ずつ集め、その合計約 800 例を分析資料として「知る」と「分かる」の置き換え可能性を判定した。
- ⑤④の判定の際、置き換え不可であった用例の意味的対立を抽出した。

以上の結果、「知る」と「分かる」の類義関係における意味的対立は、4 つの共通の枠組みで捉えられることが分かった。次節ではその枠組みについて詳述する。

表1 分析対象候補のコロケーション

類義関係	コロケーション	用例数 (「知る」/「分かる」)	頻度ランキング (「知る」/「分かる」)
I. 情報の獲得・理解	事実	3534/381	6位/61位
	内容	1667/1835	12位/13位
	状況	1400/1698	16位/14位
	名前	1369/681	18位/33位
	仕組み	742/594	36位/36位
II. 状況の把握	の	4103/16043	4位/2位
III. 会得	言葉	1320/862	19位/23位
	こつ	204/232	143位/98位
	日本語	133/420	204位/53位
	英語	89/577	279位/37位
	タイミング	68/245	361位/91位
IV. 本質理解	～さ	6850/4032	2位/4位
	違い	684/2491	41位/10位
	価値	432/346	64位/68位
	味	364/487	84位/44位
	痛み	214/353	139位/66位

5. 「知る」と「分かる」の置き換え可能性に影響する意味的対立

「知る」と「分かる」の4つの類義関係において置き換えができるかどうか4.3における分析を行った結果、置き換え可能性に影響する意味的対立は、「未知状態からの変化」「過程性の焦点化」「逆行の変化」「内的な了解能力」の4つが抽出された。これらは「知る」と「分かる」が表す認知状態の変化における4つの異なる側面を反映している。以下では、それぞれの特徴を詳述し、「知る」と「分かる」のどのような特徴と関連するのか、4つの類義関係、すなわち、I「情報の獲得・理解」、II「状況の把握」、III「会得」、IV「本質理解」のうちどれに観察される対立なのかを明らかにする。

5.1 未知状態からの変化

まず1つ目の使い分けは、「知る」と「分かる」が表す認知状態の変化において、変化が起こる以前の状態が両者で異なっていることによるものである。「知る」が表す認知状態の変化が起こる以前の状態は情報や認識が全く存在しない「未知状態」で、無から有への認知状態の変化を表す。一方、「分かる」が表す認知状態の変化が起こる以前の状態は「不明瞭な状態」であり、不明瞭から明瞭への認知状態の変化を表す。「分かる」が表す不明瞭さは、情報や認識が全くないことではなく、ある事柄についての情報や認識が混沌として整理されていない・明らかではないことを表している。このことから、認知状態の変化が起こった時、変化以前に情報が全く存在しない「未知状態」からの変化であることが表現の焦点となる場合は「知る」が使われ、「分かる」は許容されないか使用が不自然になる。

- (23) 回答ありがとうございます。網野善彦の名前を知りませんでした。また氏の本を読んでみたいと思います。[* 分かりませんでした] (類義関係 I 情報) (教えて! goo)
- (24) 「さるなし」というフルーツを紹介する HP に対するメッセージ) さるなしという名前を初めて知りました。[* 分かりました] (類義関係 I 情報) (玉川村に寄せられたお客様の声)

(23) では他の人からの回答に触れる以前はその人物に関する情報を全く持っていなかったこと、(24) では HP を見てはじめて「さるなし」というフルーツの存在について情報を得たことがそれぞれ表されている。「知りませんでした」「知りました」という表現こそ異なるが、どちらの「知る」も当該情報が全くなく、その存在すら認識していなかった状態から情報を得て認識状態に変化が生じたことが表されている。このような文脈では「分かる」の使用は不自然となる。以下の類義関係 II (状況) と IV (本質) についても同様である。

- (25) サイズがぴったりだとこんなにも快適だというのを知りませんでした。[△分かりませんでした] (類義関係 II 状況) (ペラシャリエー Perasharie 本革パンプス専門店)
- (26) そこに少女の坐っているのを、そのときはじめて知ったわけである。[△わかった] (類義関係 II 状況) (太宰治『美少女』)
- (27) 藤枝大祭りが日本一の長唄地踊りの祭りであることが明らかになったのは数年前のことで、それ以前は藤枝の人間は自分たちの祭りはごく平凡なものだとずっと思っていました。その価値を知らないにも関わらず、よくぞ続いてきたものだと思います。[△分らない] (類義関係 IV 本質) (ダイドー祭りドットコム 2011)
- (28) 活用のためには、まずその価値を知ることが大切な出発点だと思います。[△分かる] (類義関係 IV 本質) (ミュージアムトーク:「地域の文化を守る・活かす・つなぐ」/滋賀県)

以上の例で示したように、未知状態からの変化が関与する使い分けは類義関係 I・II・IV に認められたが、類義関係 III (会得) では認められなかった。技術や能力の会得を表す類義関係 III において、そもそも習熟するまでにそれなりの時間を要することが一般的であるため、未知状態からの変化で表されるような短時間での認識変化は会得の語義では表現されにくいと考えられる。

5.2 過程性の焦点化

2つ目の対立は、「知る」と「分かる」が表す認知状態の変化において、変化が起こっている途中の過程に焦点が当てられるかどうかである。「知る」は認知状態の変化が一瞬で起こることを表し、その途中の過程に焦点を当てることができない。それに対し「分かる」は認知状態の変化が一瞬で起こるとは限らず、変化の過程に焦点を当てることができる。そのため、「分かる」によって変化途中の過程に焦点を当てた文を「知る」に置き換えると不適格になる。

- (29) ぼうし、雨、花、魚、お馬さん、ワンちゃん。モノや動物の名前が分かってきたようです。[* 知ってきた] (類義関係 I 情報) (アメリカ出産記)
- (30) 日本語がとてもよく分かるようになってきました。[* 知るようになってきました] (類義

関係 III 会得)

(TOKYO にほんごトレーニング (TNT))

- (31) 入社して1, 2年目の時は色々、迷ってましたね。(中略) 2年経った頃ですかね、自分の価値が解ってきたのは。[*知ってきた] (類義関係 IV 本質)

(ABeam Consulting Recruiting Web site)

上記の例で示したように、過程性の焦点化では「分かる」が「～てくる」「～ようになる」のような変化を表す表現と共起して、認知状態が徐々に変化していることを表現できる。しかし「知る」は未知から既知へ一瞬で変化することを表しているため、変化の過程に焦点を当てられず、変化を表す表現とも共起できない。

過程性の焦点化に関わる「分かる」の用例は、4つの類義関係のうち、分析資料中に類義関係 I (情報)・III (会得)・IV (本質) において認められたが、類義関係 II (状況) では認められなかった。そこで改めて NLT で検索したところ、以下のような過程に焦点を当てた類義関係 II (状況) の用例が確認された。

- (32) 血圧が下がり始め、尿量も減り始め、体温が 35 度台になり、だんだんと (筆者注：死が) 近づいているのが分かってきたらしい。[*知ってきたらしい] (類義関係 II 状況)

(父の闘病記 12)

以上のことから、過程性の焦点化による「知る」と「分かる」の使い分けは類義関係 I～IV の全てで認められることが分かった。

5.3 逆行の変化

3つ目は認知状態の変化における方向性の違いである。「知る」の変化は未知状態から既知状態への変化の一方のみの変化であるのに対し、「分かる」の変化は不明瞭から明瞭な状態への変化だけでなく、明瞭な状態だったものが不明瞭な状態へ逆行する変化を含む双方向の変化を表すことができる。そのため「分かる」によって明瞭から不明瞭への逆行の変化が表現される場合、「知る」に置き換えることができない。

- (33) 祖母は、もう、母の名前が分からない。もちろん私の名前も。[*知らない] (類義関係 I 情報)

(ハートネット)

- (34) 自分の中でのラクロスの価値がわからなくなった時には、この言葉を思い出してほしい。
[*知らなくなった] (類義関係 IV 本質)

(ver. 1 思い続けるチカラ)

(33) では、認知症の悪化によりそれまで当然のように理解していた母の名前が認識できなくなったことを「もう分からない」で表すことができるが、「もう知らない」では表すことができない。また (34) では、それまで理解していた自分にとっての「ラクロスの価値」が何らかの理由で揺らいだことを「わからなくなった」で表現することができるが、「知る」は認知状態が元に戻る変化を表せず、また変化を表す「～くなる」と共起することもできない。

このような逆行の変化による使い分けは、類義関係 I (情報) と類義関係 IV (本質) で認めら

れたが、類義関係 II (状況) と III (会得) では用例が確認できなかった。そこで NLT で改めて用例収集したところ、類義関係 II (状況)、類義関係 III (会得) でも用例が認められた。

- (35) どちらが彼にとって現実であり、夢であるのか、というのが、わからなくなる。[* 知らなくなる] (類義関係 II 状況) (少女漫画の館)
- (36) 私も、今風の日本語が、わからなくなってしまうているので、日本語俗語辞典の情報は、とても有難いです。[* 知らなくなってしまう] (類義関係 III 会得)
(閉じられたドアの向こう側で日本語俗語の勉強)

以上のことから、逆行の変化による使い分けは類義関係 I ~ IV の全てで認められることが分かった。

5.4 内的な了解能力

4つ目の対立は、「知る」と「分かる」が表す認知状態の変化において、変化が何によって起こるかの違いによる。「知る」は外部から知識を獲得することによって認知状態の変化が起こることを表すのに対し、「分かる」は話者の内的な了解能力によって認知状態の変化が起こることを表している¹²。

- (37) ねらい・食べ物をバランスよく食べることは、体によいことを知り、いろいろな食べ物を食べようという意欲を持つことができる。食品の名前がわかる。[△知る] (類義関係 I 情報)
(めざせ! 厚木博士 食育版)
- (38) 当方の理解力不足で、情報の価値がわかりません。[* 知りません] (類義関係 IV 本質)
(岩下俊三のブログ)

(37) は食育の目標を述べた文である。「食品の名前がわかる」というのは、食品を見た時にその食品が何であるか既に持っている知識を参照して認識できることを表している。この場合「知る」に置き換えると食品の名前を新たな知識として獲得することを表し、その場で食品を見て名前が想起できることを意味しない。(38) では理解力不足によって価値が認識できないという文脈であり、「知る」の使用が不適切になる。以下の類義関係 II (状況)・III (会得) も同様に、「分かる」はその時に既に備わっている知識・感覚・能力といった内的な力によって認識することができる・できないことを表しており、そのような文脈において「知る」の使用は不自然になる。

- (39) なんだろうか。この発狂したくなるほどの恥ずかしさは。全身に熱が上っていくのが分かる。[* 知る] (類義関係 II 状況) (狼の世界へ落とされた、羊という名の戦う女神)
- (40) (帰国子女の体験談) 家族とは日本語で話していましたが (中略) 6歳で日本に戻ってからは、日本語が分からなくて苦労しました。[* 知らなくて] (類義関係 III 会得)
(ハイパー学生のアタマの中)

¹² 牧野 (1973), 渡辺 (1987) でも「分かる」が能力を表すことを指摘している。

なお、「分かる」は以下の(41)のような「どうしても」や「やはり」などの副詞を伴って、様々な努力をしても認知状態の変化が起こせない、つまりそれ以上明瞭な状態にする能力がないことを表すことがある。この種の用例を「知る」で置き換えることはできるが、その際には可能を表す「ことができない」という形式を伴い、「知ることができない」とししなければならない。つまり、「知る」自体は能力という内的な力による認識を表せないため、変化を起こす能力がないことを「知らない」という形式だけで表すことができないのである。

- (41) 花の名前がどうしてもわかりません。教えてください。[*知りません] (類義関係I情報)
(質問 171 ~ 180)

6. まとめと今後の課題

6.1 「知る」と「分かる」の類義関係と意味的対立

本研究では多義語である「知る」と「分かる」の使い分けを網羅的、および体系的に示すことを目指し、大規模なWEBコーパスを使用してどの語義で類似するかを分析し、4つの類義関係に整理した。さらに、各類義関係において「知る」と「分かる」が置き換えできない時、それぞれの意味的対立がどこにあるのかを、両形式が表す認知状態の変化の4つの側面から捉えた。これら2つの結果について、以下にまとめる。

まず、多義語である「知る」と「分かる」のうち、他方に置き換え不可能な語義と置き換え可能な語義に分け、置き換え可能な語義についてさらに意味が類似するものをまとめて4つの類義関係に分類した。その結果、図4に示したように4つの類義関係は「知る」と「分かる」の語義同士が1対1で対応するものばかりではなく、1つの語義が複数の類義関係に対応していたり、複数の語義が1つの類義関係にまとめられたりする、複雑な関係であることが分かった。

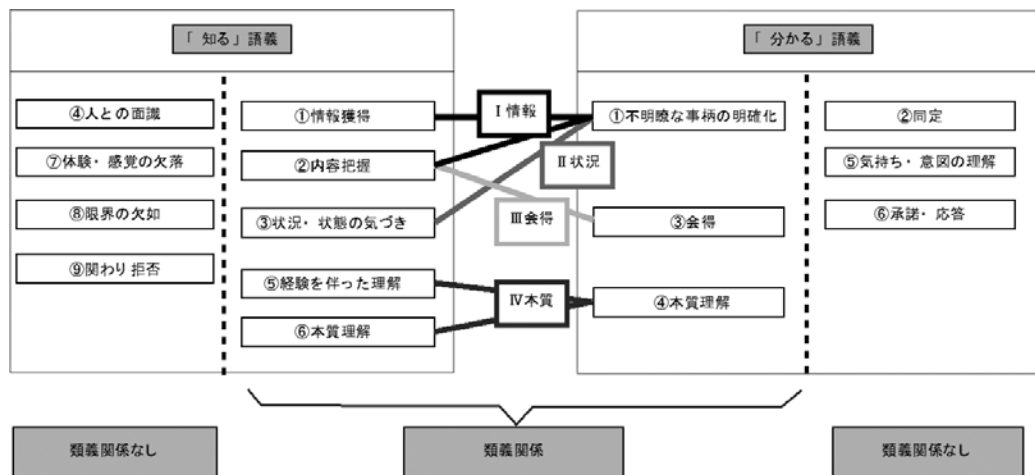


図4 「知る」と「分かる」の語義対応

次に、I～IVの各類義関係において「知る」と「分かる」が置き換えてできるケースがあるが、常に置き換えられるわけではないためコーパスから収集した用例の分析を行った。その結果、同じ類義関係であっても異なる4つの意味的対立によって「知る」と「分かる」に使い分けが生じることが明らかになった。さらに、この4つの意味的対立は、特定の類義関係のみに関与するのではなく、異なる類義関係にある場合にも等しく関与し、「知る」と「分かる」の語義全般に関わる使い分けの要因となっていることが明らかになった。

以下の表2は「知る」と「分かる」の使い分けに関与する4つの意味的対立を整理したものである。4つの意味的対立に関わる意味のうち、1つが「知る」の持つ意味で、残りの3つは「分かる」の持つ意味である。また、これら4つの意味的対立はそれぞれ「知る」と「分かる」が表す認知状態変化の異なる4つの側面を表していると捉えることができる。具体的には、「未知状態からの変化」は「認知状態変化の以前の状態」、「過程性の焦点化」は「認知状態変化の過程」、「逆行の変化」は「認知状態変化の方向性」、「内的な了解能力」は「認知状態変化が起こる要因」である。

この4つの意味的対立は「知る」と「分かる」が表す認知状態変化の異なる側面をそれぞれ示しているため、この対立を理解することは「知る」と「分かる」の本質的な意味の違いをより明確に理解することにもつながる。本質的な意味の違いが明確になれば、学習者は使い分けが必要な個々のケースを覚えるよりも容易に誤用を避けることが期待できる。

表2 「知る」と「分かる」における4つの意味的対立

意味的対立	用例	知る	分かる	認知状態変化における対立点
A 未知状態からの変化 類義関係 I・II・IV	さるなしという名前を初めて知りました	○	×	認知状態変化の以前の状態
B 過程性の焦点化 類義関係 I・II・III・IV	モノや動物の名前が分かってきたようです	×	○	認知状態変化の過程
C 逆行の変化 類義関係 I・II・III・IV	祖母は、もう、母の名前が分からない	×	○	認知状態変化の方向性
D 内的な了解能力 類義関係 I・II・III・IV	当方の理解力不足で、情報の価値がわかりません	×	○	認知状態変化が起こる要因

6.2 今後の課題

本研究で明らかになったことは、日本語教育の現場において、「知る」と「分かる」の使い分けを説明する際に有効な資料となりうる。しかし、本研究は日本語母語話者が認定した「知る」「分かる」の類義関係からの分類であるため、実際の学習者による誤用は母語の影響など今回示した類義関係の範囲の外に要因があるケースや、「知る」と「分かる」以外の動詞との混乱など、今回の分析範囲に収まらない誤用があることが予想される。実際の学習者の誤用に対し、今回の結果がどの程度有効なのか、さらに検証する必要がある。

参考文献

- 赤瀬川史朗・ブラシャント パルデシ・今井新悟 (2016) 『日本語コーパス活用入門—NINJAL-LWP 実践ガイド』東京：大修館書店。
- 葦原恭子 (2010) 「日常会話における「わかる」と「知る」の使い分け—談話の分析を通して—」『留学生教育：琉球大学留学生センター紀要』7: 17-32.
- 張静・馬場俊臣 (2005) 「日本語と中国語の認識を表す動詞の対応—「知る」と「分かる」の中国語訳を中心に—」『北海道教育大学紀要 (人文科学・社会科学編)』56(1): 67-81.
- Hopper, Paul J. and Sandra A. Thompson (1980) Transitivity in grammar and discourse. *Language* 56: 251-299.
- 牧野美智子 (1996) 「現代日本語「シル」と「ワカル」の類義関係について—文脈において二動詞がとる対象からの分析—」『湘南文学』30: 157-168. 東海大学日本文学会.
- 牧野美智子 (1998) 「「知ル」の〈体験性〉にみる意味の焦点化の構造」『湘南文学』32: 95-107. 東海大学日本文学会.
- 牧野成一 (1973) 「「分かる」「知る」と understand, know について」『英語教育』21(12): 14-17.
- 高橋圭介 (2003) 「類義語「しる」と「わかる」の意味分析」『日本語教育』119: 31-40.
- 角田太作 (2007) 「他動性の研究の概略」角田三枝・佐々木冠・塩谷亨 (編) 『他動性の通言語的研究』3-11. 東京：くろしお出版.
- 渡辺伸治 (1987) 「シル・ワカル」国広哲弥 (編) 『意味分析 2』9-11. 東京：東京大学文学部研究室.

関連 Web サイト

基本動詞ハンドブック (国立国語研究所) <http://verbhandbook.ninjal.ac.jp>

NINJAL-LWP for TWC (筑波大学・国立国語研究所・Lago 言語研究所) <http://nlt.tsukuba.lagoinst.info>

Corpus Analysis of the Polysemic Quasi-Synonymous Words *shiru* and *wakaru*

NABATAME Tomomi^a TAKAHARA Mari^b SUNAKAWA Yuriko^c

^aTokyo University of Marine Science and Technology / Project Collaborator, NINJAL

^bProject Collaborator, NINJAL

^cInvited Professor, JSL Research Division, Research Department, NINJAL /
Professor Emerita, Tsukuba University

Abstract

This study's purpose is on quasi-synonym instruction that can be easily understood by Japanese language learners. It aims to systematically describe the differences in the usage of two verbs, *shiru* (know) and *wakaru* (understand), each of which denoting a variety of meanings. For the purpose of systematic description, we collected examples from the large-scale Tsukuba Web Corpus (TWC). From our analysis of the possibilities of substituting *shiru* and *wakaru* under each meaning, we were able to sort the meanings into four synonymous relations: (i) acquiring and comprehending information, (ii) understanding a situation, (iii) mastering a skill, and (iv) comprehending the essence of something. Furthermore, the finding of how *shiru* and *wakaru* are semantically opposed when they cannot be substituted, we demonstrated that the differences in usage within each synonymous relation can be explained with a common framework derived from four aspects of the changes in the state of cognition that the two verbs express, namely, (i) changes from a state of not knowing, (ii) the focus on processes, (iii) retrogressive changes, and (iv) internal comprehension ability.

Key words: quasi-synonyms, polysemic word, usage differences, corpus, changes in the state of cognition